

次世代のがん治療といわれるホウ素中性子捕捉療法(BNCT)装置が、病院としては世界で初めて総合南東北病院(福島県郡山市)に導入されることが決まった。同病院でBNCT準備室長として導入の責任者を務める瀬戸院一氏(73)は「日本の英知を集めたプロジェクトであり、世界が目している。失敗は許されない」と気を引き締めている。

BNCTはホウ素を取り込ませたがん細胞に中性子を照射し反応させ、破壊する治療法。がんの周囲にある正常な細胞への影響が極力抑えられるのが特徴だ。外科手術や既存の放射線治療では難しい再発がんや進行がんの治療にも有効とされる。

瀬戸氏は口腔(こうくう)外科専門の歯科医。最新鋭の医療機器を備え、がんや脳神経疾患の治療に意欲的に取り組む総合南東北病院の渡辺一夫理事長(67)に引かれ、2009年6月、同病院の口腔がん治療センター長に就任した。

BNCT導入の責任者となった理由の一つは、舌がんなどの口腔がんが新しい

次世代がん治療拠点を準備——瀬戸院一さん

ニュースな人ヒト



治療法の対象となるため。口腔がんを含む頭頸(とうけい)部の腫瘍や脳腫瘍、将来的には皮膚がんや中皮腫なども治療できるとされる。

治療には国内外から患者が集まると予想される。海外の病院と協力体制をつくるために同病院の国際医療推進部長も任されている。

「口にはしゃべる、食べるなど重要な機能があるが、手術で大きながんを切除すると機能障害は避けられない」と瀬戸氏。「患者の満足を得るには外科手術の限界を感じていた。切らずに治せるBNCTの可能性に期待している」

「原発事故後の福島に新しい活力を」。5月16日、県が公募したBNCT導入先の最終審査で、瀬戸氏は渡辺氏と共に力説した。

11年3月、東日本大震災と東京電力福島第1原発事故が発生。現在、福島県民約9万5千人が県内外で避難生活を送り、放射線被曝(ひばく)による健康への影響に不安を抱えている。

地域経済が大きな打撃を受けるなか、県は医療産業を復興の柱の一つと位置付

た。この習慣の影響で口腔がんが多発する東南アジアでの医療活動など、国際経験の豊かさ。世界初のがん

を復興の柱の一つと位置付

診療や治療体制の整備で国内外を飛び回り、「毎日が充実している」と語る

けており、ほかにも県立医大に抗がん剤の開発拠点をつくるなどの計画を打ち出している。

東京生まれの瀬戸氏だが、復興にかけるといっては強い。「福島県を最先端のがん治療拠点にしたい。BNCT導入が呼び水となって風評被害が収まり、地域経済立て直しにつながれば」

新治療法導入の総事業費は約68億円。県からは国の復興予算を元に43億円の助成を受ける。13年度に新装置を備えた施設を完成し、14年度から頭頸部がんを対象に臨床試験(治療)を開始、16年度には本格的な治療を始める計画だ。

瀬戸氏は、BNCTの開発や治療を進めている京都大や筑波大などの間で情報共有を進め、スムーズに治療体制を築く実務を取り仕切ることになる。

日本顎顔面インプラント学会理事長なども務め、総合南東北病院やグループ病院で診療も行っている。福島、東京、大阪、海外を行き来する多忙の日々だが、「大学教授時代以上に毎日が充実している」と疲れも見せずに飛び回っている。

(社会部 今井孝芳)

最先端の医療、復興の柱に